

海外文献紹介

## 親密な関係における依存性のパラドックス： 依存の受容が自立を促進する

竹澤 みどり\*

The dependency paradox in close relationships: Accepting dependence promotes independence

Brooke C. Feeney, Carnegie Mellon University

Journal of Personality and Social Psychology, Vol. 92, 268-285, 2007

一般的に、依存的な行動は人をより依存的にし、自信を失わせると信じられている。多くの西洋文化では他者に依存することは弱さの表れであり、自信を失わせるものとみなされている。しかし、愛着理論では愛着対象への健全な依存が生涯を通してより良く生きるためには重要であり、愛着対象によって依存が受容されることがむしろ依存性を減少させるとしている。これまで、この仮説は主に子供を対象として実証されているのみであり、成人においては未だ検証されていない。そこで、親密な関係にある成人カップルを対象に、必要な時にパートナーによって依存が受容されることによって、その受け手の依存性が減少し、より自律的に機能することができ、自信が増大するかを検証することを目的とした。(以下、依存を受容する側を“パートナー”、受容される側を“受け手”とする。) 依存の受容を「相手の欲求に対する反応性や相手の苦悩のサインに対する敏感さ」とし、自律的な機能は自立性や自己効力感、自立的な探求活動への取り組みによって操作化した。

### 研究 1

#### 方法

**参加者：**115組のカップル（平均年齢は27.5歳）が参加した。

**手続き：**1) **報告式評定：**パートナーによる依存の受容は、独自に作成した尺度と Caregiving Questionnaire (Kunce & Shaver, 1994) によって測定された。受け手の自立的機能は、自己効力感尺度 (Sherer, Maddux, Mercandante, Prentice-Dunn, Jacobs, & Rogers, 1982) と目標を達成するための自身の能力に関する自己評定、目標を追求する程度や新しい探索の機会に自立的に進んで取り組む程度に関する自己評定等によって測定された。2) **観察評定 1：**実験室において、受け手が挙げた個人的な目標についてカップルで話し合うよう求められる。このやり取りを録画し、依存の受容を示すパートナーの3種類の言動（パートナーからのサポートの将来的な利用可能性を示すやり取り、目標に関連した問題に対処することの回避、敏感で反応的なサポート提供）と受け手の目標追求に関連した自立的機能を示す2種類の言動（自信を持った目標の追求、自立的な目標追求の回避）についてコード化した。3) **観察評定 2：**受け手が

\* 富山大学保健管理センター

一人で実験室においてコンピューターゲームを解くよう求められる。パートナーは別室からコンピューター上でそのゲームを見ることができる状態で、受け手に簡易メッセージを送ることができる状態と教示される。パートナーからのメッセージは受け手の見ているスクリーンの右側に見えるようになっている。しかし、実際のメッセージは全て実験者によって与えられる。受け手は、答えを教えるなどの道具的なサポートを提供するメッセージを与えられる条件と、情緒的なサポートを提供するメッセージを与えられる条件に割り当てられる。受け手の自立的探求を示す3種類の態度（パートナーからのメッセージへ注意を払う程度、メッセージへの反応性、メッセージに対する拒否的な態度）がコード化された。

## 結 果

パートナーによる依存の受容は、受け手の自立的機能に関するすべての指標（自己効力感、自立的探求への取り組み、目標の達成能力、独立性、自己信頼感）と有意な正の相関を示していた。受け手は、自身の依存欲求に対してパートナーが受容を示した時には、より目標の追求に自信を持ち、それを回避せず、将来パートナーのサポートが利用できることについて言及されているときには目標の追求を回避しようとしなかった。パートナーによる依存の受容は、受け手の道具的サポートを提供するメッセージへの注意深さや反応性とは負の、拒絶とは正の相関を示したが、情緒的サポートではそうではなかった。

## 研究 2

### 方法

参加者：165組の既婚カップル（平均年齢は39.1歳）が参加した。

手続き：1）報告式評定（Time 1）：概ね研究1と同様。（ただしここでの受け手の挙げた自立的目標はこの後6カ月で達成可能なものとした）2）観察評定（Time 1）：概ね研究1と同様。3）報告式査定（Time 2：6ヶ月後）：受け手の自立的機能の査定として、自己効力感尺度（Time 1と同様）、目標に特化した自立的機能の査定として、“6か月前に挙げた目標を達成したかどうか”を用いた。

### 結 果

階層的重回帰分析の結果、Time 1においてパートナーによって依存が受容されている受け手は、Time 2において高い自己効力感を示し、より自立的探求への取り組みを行っていた。また、また、6ヶ月後に目標を達成したか否かで、Time 1でのパートナーの依存の受容が異なるのかを検証するために分散分析を行った。その結果、目標を達成した受け手のパートナーの方が、6か月前の時点より依存を受容していたことが示された。

### 総合考察

様々な方法を用いた2つの研究から、人は依存を受容されることによって、結果的に自立を促進させるという逆説的な仮説が実証的に支持された。つまり、重要な他者の愛着欲求の受容やそれに対する反応の良さによって、人は自信を持って自立的に世界を探求することが可能となるという愛着理論における仮説に実証的なエビデンスを提供したと言える。